

豊島プロジェクト

代表者 田中 美理(経済学部地域社会システム学科 3年)
平井 美希(経済学部地域社会システム学科 3年)

1. 目的と概要

過疎化・高齢化の進行する豊島でエコ・ツーリズムによる地域活性化の可能性を調査する。そのためにまず、資源調査、住民に対する意識調査、ニーズ調査を行う。そして、今後のモデル・ツアーの実施、企画等に結びつけることができるよう提言を行う。



2. 実施スケジュール

平成19年	6月	実地調査(豊島)
	10月	今後の活動に関する打ち合わせ(高松)
	12月	アンケートに関する打ち合わせ(豊島)
平成20年	1月	アンケート配布(豊島)
	1月	アンケート回収(豊島)
	2月	調査報告会に関する打ち合わせ(高松)
	3月	アンケート調査報告書を豊島全戸に送付(小豆島)
	3月	調査報告会、豊島住民との意見交換、今後の打ち合わせ、交流会、地域住民による地域活性化活動に参加(豊島)

3. 成果の内容及びその分析・評価等

申請当初は、イベントの開催やモデル・ツアーの実施など、具体的なイベントを開くことをプロジェクト内容として重きを置いていた。しかし、一方的な地域活性化ではなく、双方向的な活性化を目指したいと考え直すにいたった。そこで今年度は、豊島の住民が何を考え、何を望んでいるかを調査することが今後の活動にもつながっていくであろうと考え、アンケート調査を実施することにした。

アンケート配布(1月12日)、回収(1月20日)

- ①豊島のことをどう感じているか
- ②今後の豊島にどんなエコ・ツーリズムの実施が必要か
- ③どんなことなら島民の方に協力をしていただけか

大きくこの3点を聞く内容で、これまでに豊島で行われたことのあるアンケート調査を十分に参考したうえでアンケートを作成した。回収率を上げ、より正確なデータを得るために、豊島の全戸（516戸：現時点の世帯数）を1軒ずつ回り、アンケートの趣旨を説明しながら手渡しをした。アンケートは16歳以上の全島民を対象にした。配布日（1月12日）、回収日（1月20日）ともに大変寒く、雨や雪の降る大荒れの天気だった。にもかかわらず、グループごとに（配布は5グループ、回収は6グループ）島民の方が1人同行してくれた為、スムーズに配布、回収を行うことができた。1軒1軒回っていくことにより、普段の調査ではわからない、豊島の全体像が少し見えた。深刻な問題としては、やはり高齢化の問題があげられる。1日かけての配布、回収だったにもかかわらず、子供にはほとんど会えず、訪問しても、体が不自由なためなかなか玄関まで出てくることができない老人がたくさんいた。こういったこともあり、配布当初は、回収率は悪いのではないかという不安があった。だが意外にも、回収率は大変高く今後の計画につながるようなものとなった。回収率がよかった背景には、1軒ずつ回って趣旨を説明したこと、島民の方がアンケート慣れをしていたこと、配布と回収の期間があまり開かなかったことだと考えられる。



アンケートの分析結果

分析結果からは、主に以下のようなことが分かった。（簡略化）

- ①豊島の「自然」と「新鮮な農作物・魚介類」を島民の方が誇りに思っていること
- ②荒れた田畑や空き家が多いことを悲しく思っていること
- ③それらの景観を整備することに関心を持っていること
- ④「豊島といえばコレ！」というような、特産品の必要性があるということ

アンケートの分析結果の調査報告会(3月15日)

アンケート結果は、調査報告書にして豊島の全戸に配布した。調査報告書をもとに「島民の人が思っていること」に対して「私たちができることは何か」を調査報告会で発表をした。調査報告会の流れは、まずパワーポイントで発表し、その後、島民の方の感想を聞き意見交換を行った。

その後、交流会へという流れだった。そこでは、今後の活動の方向性を島民の方と話し合うなど、有意義な会とすることができた。



4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

この事業により大学は、積極的に地域社会への貢献を行い、活性化の協力をしているという影響を、また地域社会（豊島）には、エコ・ツーリズムの開発を通じて地域の活性化となるきっかけを与えることができたと思う。

調査報告会の際、島民の方は「若い人が豊島に来てくれるだけでも嬉しい。」と話されていた。確かに、そういう言葉が出てくるほど豊島の過疎化、高齢化は進んでいる。アンケートの配布、回収に伺った家の大半はお年寄りの方だけで住んでいる。私たち学生がこうやって豊島に足を運ぶことだけでも、豊島の方を元気にしているということを実感した。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

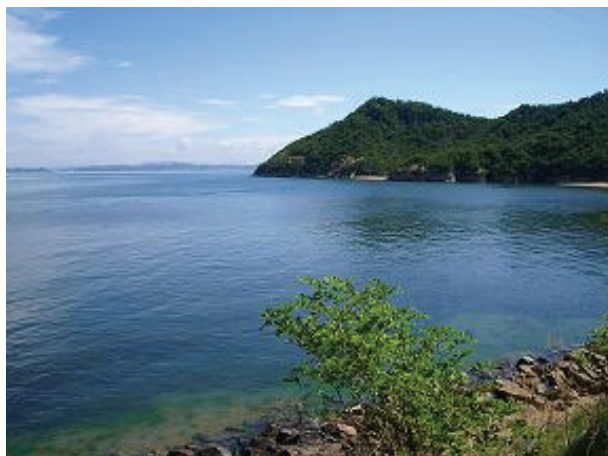
やはり、今回のプロジェクトの1番の成果は私たちに与えた影響が大きいと思う。私たち学生は、全戸調査という無謀とも思えるフィールド調査であったが、それにより、地域の抱える問題をより具体的に知ることができた。今後、日本は人口減少時代へと進み、ますます高齢者が増え子供の割合が減る。日本が今後抱える、過疎化・高齢化問題は、すでに豊島で始まっている。その現状をみることができた。現場での実地勉強が生きた学問となり、本当の意味での「勉強することとは何か」を理解できたと思う。516戸を1軒ずつ回っての全戸調査は、普通に考えれば無謀なことである。もちろん豊島の方の協力があったことだが、私たちにしてみれば大きな自信につながった。「無理だ。」と諦めそうになっても、とりあえず動いてみることに、挑戦してみることはどのような場面でもいえることであり、これからの学生生活においても、「やり遂げる力」は活かせるだろう。



6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

感想

1 番驚いたことは、報告会に多くの方（20 名近く）が参加してくれたことである。多くの島民の方には分析結果に納得して頂けた。そして「これからも一緒にがんばろう」等の励ましの声を受け取った。だが、なかには「これまでも豊島に関して研究する人は多くいたが、実際に豊島で何かを起こそうという人はなかなかいなかった。だから君たちもそうではないか。」と厳しい意見を言われる方もいた。これが過疎化に悩む地域の本音だろうと思う。ただ、厳しい意見を言われる方も協力したいと言ってくれる方も、どちらも私たちのこれからの活動に期待しての発言だということはいくわかった。



このアンケートはあくまで豊島での活動の第一歩であって、これからにつなげていくべきものである。私たちはこの豊島の方の期待に少しでも応えていけるような活動を、これからも行っていきたく強く思う。

今後の抱負（計画）

来年度は今回のアンケート結果を踏まえ、より具体的に（（例）ため池周辺の整備、休耕田の景観整備、豊島の自然・歴史文化の資源調査、島をよく知る人たちに対する聞き書き等）島民の方と協力して、学生ができる地域活性化を行いたいと考えている。また、卒業してもこのプロジェクトは継続してほしいので、継承者をもっと見つけたいと思う。

7. 実施メンバー

代表者	田中美理（経済学部 3 年）
構成員	平井美希（経済学部 3 年）
	鈴木昌子（経済学部 2 年）
	佐伯知香（経済学部 2 年）
	水口郁枝（農学部 3 年）
	原 直行（経済学部教授）